

研究授業「子どもと音楽表現Ⅰ」の実施

柴 田 玲 子*

Conducting and Reflecting an Open Research Class,
Children and Musical Expression I

SHIBATA Reiko

要約

本稿は、令和 6 年度第 1 回保育学科研究授業として行った「子どもと音楽表現Ⅰ」全 15 回中 15 回目の授業の実施報告である。最終回としてのまとめであるとともに後期開講の授業への導入として実施した。

保育者自身が子どもにとって望ましい音楽環境となるためには、自ら音楽を楽しむことができなければならない。そのために必要な「弾き歌い」の技術を身につけることがこの授業の大きな目的になっている。同時に、それを通して人前で臆することなく歌い、話すことができる気持ちの持ち方をも身につけることをめざす授業である。

キーワード：保育、子どもの歌、表現

Abstract

This paper is a report on the implementation of the fifteenth of fifteen Children and Musical Expression I classes which was held as the first research class of the 2024 academic year in the Department of Child Care and Education. In order for childcare workers to create a desirable musical environment for children, they must be able to enjoy music themselves. The main aim of this class was to teach the necessary skills to sing and play music. At the same time, the class also aimed to help students develop the confidence to sing and speak in front of others without hesitation.

Keywords: early childhood education seminar, children's songs, expression in music

はじめに

本学では音楽に関する科目として、第1 Semesterで「子どもと音楽表現Ⅰ」、第2 Semesterで「同Ⅱ」、第3 Semesterで「ピアノ特別演習」、第4 Semesterで「保育内容－音楽表現」と「保育の表現技術発展演習(音楽＋造形)」を開講している。今回の研究授業とした「子どもと音楽表現Ⅰ」は幼稚園教諭二種免許状取得のための必修科目(領域に関する専門的事項)として、さらに保育士資格取得のための「保育内容の理解と方法に関わる科目」として位置付けている。

第1 Semester開講の本科目においては、入学時、学生の音楽経験の個人差が大きいため、個別対応の必要性があり、全体をABの2クラスに分け、さらに個別対応が可能になる小グループ(4～6名)にして複数教員で授業を行っている。全5室の電子ピアノ教室には、それぞれグランドピアノ1台と電子ピアノ6台を設置、学生はヘッドフォンを用いて電子ピアノで練習しつつ、一人ずつグランドピアノの方に向けて指導するという形態をとっている。

今年度入学生からカリキュラムの変更により授業者が担当していた「保育内容－音楽表現」が1年後期必修から2年後期選択となった。そのため、その授業内容のうち、早期に、そしてすべての学生に知っておいてほしい基礎的な内容をこちらの授業で扱う必要性が出てきたと感じている。これまでの弾き歌い指導に加えられることには限界があるが、今年度は他の教員とも連絡を取りながら授業改善を試みているところである。

講義形式のクラス授業ではないため(当日の学生の状況によりその都度流れが変化するので)研究授業として成立するかという躊躇いはあったが、学生の現状を学科の先生方に見ていただくよい機会と捉えて実施した。

1. 「子どもと音楽表現Ⅰ」の授業について(本学シラバスより抜粋)

【授業の紹介】

子どもの発達に音楽が果たす役割は非常に大きくまた重要で、保育所、幼稚園、認定こども園において音楽は生活の一部として取り入れられています。保育所、幼稚園、認定こども園で日常的に用いられている音楽の演奏や季節の歌などの弾き歌いに重点を置いてレパートリーを増やすとともに、さまざまな教材を用いて音楽表現の基本的知識・技術を習得し、感性を豊かにすることをめざします。本授業科目は保育学科の卒業必修科目です。また幼稚園教諭二種免許状及び保育士資格取得のための必修科目でもあります。

【ディプロマポリシーとの関連】ディプロマポリシー1～4の内、2～4に関連

2. 自分に厳しく、子どもと保護者に温かく接することのできる豊かな人間性
3. 高度な専門的知識と的確な洞察力や判断力
4. 多彩な保育活動を創出する基礎技能を基盤とした保育実践力

【学修成果との関連】(L0 値)

学修成果：学生が短期大学の学びを通して何を知り、何を身につけ、何ができるようになるかを事前に表明したもので、すべての科目は学修成果の各項目のいずれかと関連し、関連性はシラバスに示される。

L0 値：本学保育学科が各授業科目でめざす学修成果として以下の 12 項目を設定した。

それぞれの授業科目から得られる学習成果を 10 として、12 個の学修成果のどれをどの割合でめざすかを数値化したものを L0 値とする。

- ①使命感 ②望ましい行動 ③規範意識 ④自律心 ⑤温かさ ⑥協働・連携する力
⑦指針・要領の理解 ⑧保育に関わる専門的知識の習得 ⑨洞察・判断する力
⑩表現技術と創造力 ⑪保育を計画する力 ⑫子どもと関わる力

本授業科目の L0 値 ⑤温かさ (1) ⑧保育に関わる専門的知識の習得 (2)
⑩表現技術と創造力 (5) ⑪保育を計画する力 (1)
⑫子どもと関わる力 (1)

【到達目標】

1. 音楽表現の専門的知識と技術の基礎を身につけることができる。
2. 実際に演奏することで表現することの楽しさを実感することができる。
3. 他者の音楽表現を聴くことで、イメージを豊かにすることができる。
4. 音楽表現の基礎技能を基盤とした保育実践力と創造力を身につけることができる。

【授業計画】より 発表会（演奏試験）の経緯

通常時は個々のレベルに合わせた個人指導を中心に行っており、その内容は省略した。

回	日 程	内 容
1	4/5 補講	オリエンテーション 音楽経験の調査と演奏曲目の決定 基礎知識に関する課題シート配布
2	4/12	基礎知識の確認、読譜用練習シート配布 歌のレパートリーを増やそう① 知っている歌の旋律を弾く→弾きながら歌う
3	4/19	略
4	5/1	略
5	5/10	略
6	5/17	中間発表会（1）1～3 曲を発表し、人前での弾き歌いを経験する
7	5/24	略
8	5/31	略
9	6/7	人前で弾き歌いをする練習 歌唱指導の基礎①
10	6/14	中間発表会（2）1～3 曲を発表し、人前での演奏において平常心を保つことや歌と伴奏の調和の達成をめざす

11	6/21	略
12	6/28	略
13	7/5	人前で自分を表現できる練習 歌唱指導の基礎②
14	7/12	まとめの発表会 1～3 曲を発表する
15	7/19 本時	歌唱指導の基礎について振り返る 「子どもと音楽表現Ⅱ」の課題曲研究とレベルに応じた伴奏の決定

参考：今年度課題曲（前後期とも 4/5 に発表）

子どもと音楽表現Ⅰ（前期開講）4 曲

かわいいかくれんぼ・とんぼのめがね・山の音楽家・ドレミのうた

子どもと音楽表現Ⅱ（後期開講）5 曲

おもちゃのチャチャチャ・おつかいありさん・一年生になったら

あめふりくまのこ・あわてんぼうのサンタクロース

2. 研究授業の日程

研究授業および検討会は次の日程で行われた。

〈研究授業〉 日 時：2024 年 7 月 19 日（金）

2 校時 A クラス 10:40～12:10 or 3 校時 B クラス 13:00～14:30

場 所：2410 電子ピアノ教室 4

授業科目：子どもと音楽表現Ⅰ

履 修 生：保育学科 1 年生 2 校時 4 名、3 校時 4 名

参 加 者：保育学科教員 5 名（2 校時 2 名、3 校時 3 名）

〈検討会〉 日 時：2024 年 7 月 19 日（金）5 校時 16:20～17:50

場 所：2217 演習室

参 加 者：保育学科教員 授業者を含め 6 名

3. 学習者の状態

入学して 4 ヶ月、入学前音楽経験の個人差に対しては、少人数クラスに分け、個人レッスンの形で指導することによって対応してきた。その中で（4～5 名のクラス）メンバー相互に弾き合うことや他のメンバーを子どもに見立てて簡単な歌唱指導をすることで、立場を変えて学び合うことによる大きな効果が得られている。

ここでこの授業に備えた入学前教育の改善について触れておきたい。以前は「入学前教育」として、入学予定者全員を 12 月あるいは 2 月に登学させ、音楽（弾き歌い）授業の概要を示し、希望者にはその時点で教科書も販売、入学までの期間に少しでも曲に触れるような環境を作るという取り組みを続けてきた。しかし、教科書を与えただけでは、入学後、何名かの経験者のみが「少し弾いてみた」程度にとどまり、思うような効果が得られなかった。

今年度入学生から希望者、特に初心者に対して「入学前レッスン」を開始、全8回(11月から1月までの土曜日と2月・3月は金曜日で大学行事に差し障らない日)実施することができた。入学後、フレッシュな気持ちで教科書に臨むことができるように、テキストとして、授業で用いる教科書は使用していない。主に初心者や未経験者の不安を取り除くために実施したので、独自に編曲・作成した超簡易伴奏28曲のテキストでレッスンを進めた。このテキストは、未経験者でも無理なく「弾けた・歌えた」と感じることができるように、そして高校の行事などでリピート参加が難しい場合でも、自学自習できるように一曲ずつ演奏のポイントなどを示したものである。簡単なアレンジでもレパートリーが次々と増える楽しさから意欲的に取り組んだ高校生が多く、入学後も教科書以外にこのテキストを継続的に使用してレパートリーを増やそうとしている学生も見受けられる。入学生の半数はこのレッスンに参加、8回中5回以上参加した生徒も5名いる。レッスンに参加することでどの生徒も目標が明確になり、順調に意識・意欲を高めることができた。入学後、その(初心者だった)学生たちがグループをリードしていくような形で授業も進み、大きな成果となっている。

4. 設定した主題

「子どもと音楽表現Ⅰ」全15回のうちの第15回目、最後の授業となる本時は、学生個々に弾き歌いから歌唱指導にどのように取り組むかについて振り返る時間とした。6月から開始した歌唱指導はグループの仲間を子どもと見立てて行ってきたが本日でもまだ3回目であり、十分な経験にはなっていない。後期開講の「子どもと音楽表現Ⅱ」でさらに深めていく手掛かりになることをめざしたい。この科目の本来の目標である弾き歌いについては、すでに発表されている後期課題曲に取りかかる時期にきている。前期と比較して難度が高いため、夏季休暇中に意欲を持って取り組むことが必要不可欠であり、それぞれの曲に取り組むことができるようなきっかけを与えることも本時の主題とした。

5. 指導案

子どもと音楽表現Ⅰ 15/15

2024年7月19日(金) 2・3校時

I. 本時のねらい

- ・弾き歌いの振り返りとまとめ・歌唱指導への導入
- ・後期課題曲について各自に適した楽譜を選択し積極的に取り組む意識を高める

Ⅱ. 使用教材・資料

- ・教科書『子どものうた村 保育の木』
- ・資料①：後期課題曲のポイント(概要のみ後述)
- ・資料②：指遣いを記入した教科書楽譜のコピー
- ・簡易伴奏譜(必要な学生のみ)

Ⅲ. 授業の流れ

経過	内 容	指導上の留意点
0:00	これまでに取り組んだ曲の中から一曲を選択し（前時に指示済）弾き歌い→簡単な歌唱指導	「弾き歌いができた」に留まることなく余裕を持って保育に応用できるように、授業に慣れた 6 月から演奏が一応完成した時点、発表会の前の週に歌唱指導のまねごとをさせている （本時で 3 回目＝2 曲目 or 3 曲目） 子どもにどのように言葉をかければ興味を持って歌に導入できるかという部分を経験させたい
0:25	後期課題曲の確認と発表会の説明 （10 月実施特別試験の説明）	夏季休暇中に意欲を持って毎日鍵盤に触れる習慣を維持させる （特別試験の条件・・・課題曲全曲を教科書通りの伴奏で演奏）
0:30	後期課題曲それぞれについて演奏上注意するポイントを資料①により説明し、推奨する合理的な指遣いを提示する 短い時間ではあるが部分的に練習する 約 7～8 分×5 曲 （その間、試験からの 1 週間で練習してきた学生に対しては個対応） 必要な学生は自由曲の選択に入る	・教科書楽譜中の各種記号等を理解 ・楽譜の選択 必要な学生には簡易伴奏譜を配布 ・指遣いの確認（特に初心者） 5 曲とも、とにかく弾き始めておくことで取りかかりのハードルを下げる 10 月の特別試験受験予定者に対して自由曲選択に助言し、曲を確定する
1:15	まとめ	夏季休暇中も対応することを周知する 授業評価の入力を促す

資料①の概要： 課題曲 5 曲について作詞者・作曲者に注目させ、特に作曲者については他の作品（子どもの歌）についても触れた。さらに楽譜から読み取ることのできる（音楽理論的な）内容を説明・確認した。各曲の調子（調号・音階）と拍子、速度標語と速度記号、反復記号、発想用語、音の強弱を表す記号の確認等、楽譜を扱う上で常識となる基本的な記号や語句である。必要に応じてこれまでも指導してきた内容ではあるが、それをまとめて示したものである。

6. 授業を実施して

（1）主題の設定について

弾き歌いの振り返りとまとめ：今年度はクラスのメンバーのほとんどが課題曲 4 曲を 6 月の発表会でクリアできたため、その後、レパートリーを増やすために自由曲を選択して練習してきた。ただ、学生によってはまだ弾き歌い、特に「歌う」部分に恥じらいがあり、十分に（子どもに聞こえる明るい声で）歌えているとは言えないのが現状である。メンバー全員で一緒に歌うことや伴奏なしで歌うことなど形を変えて取り組んできたが、未だ子どもの前で歌うレベルには達していない。これは一朝一夕にいかないもので、後期「子どもと音楽表現Ⅱ」で引き続きピアノ指導と共に声を引き出していく試みを続けたい。

歌唱指導への導入：必要性を感じて授業に組み入れた初めての試みである。入学時、鍵盤初心者はピアノ演奏から弾き歌いに達するだけで精一杯の場合が多い。しかしその程度では保育の場に活かすことが難しく、実習・就職後も保育者として子どもにとって良好な音楽環境を作ることができないでいることが気になっていた。保育者が楽しそうに弾き歌いできることが、子どもに歌いたい気持ちを引き起こす。今回の取組は、個々に選んだ曲にどのように導入するか、歌詞の言葉をどのように伝えるのか、歌いだしの合図はどうするのかといった基本的な部分である。「歌唱指導」というほどのものではないにしても子どもと一緒に楽しく歌うために必要な最低限の言葉かけを体験させる機会をこの授業で設けることで音楽から逃げることのない保育者を育てたいと考えた。

後期課題曲への導入：目標の一つとして楽譜からの情報を正確に読み取ることを意識させるよう考えた。弾くのが精一杯で音符と歌詞しか目に入っていなかった学生に対して、楽譜に表現された各種記号等にも目を向けさせるために、課題曲で注目すべき部分についての説明を一覧にして配布した。演奏に際して、後期課題曲は前期よりかなりレベルが高い 5 曲であり、10 月に早くも一回目の発表会（演奏試験）があることを考えると夏季休暇中の取り組みが不可欠となる。4 月から継続してきたピアノ練習のペースが夏季休暇中に途絶えてしまわないようにしたい。そこで、今回の授業の中でそれぞれの曲について少しずつ弾いてみるにより、取りかかりのハードルを下げることに繋がったのではないかとと思われる。教科書通りの伴奏が難しい学生には授業者編曲の簡易伴奏譜を配布した。今回、特に高音域の声が出しにくい学生はいないため、すべての楽曲は原調のままで簡易伴奏を作成した。後期に入ってからさらに編曲が必要な部分も出てくると思われるが個対応する予定

である。

(2) 授業の流れについて

歌唱指導については、学生個々に簡単な提示物を作成してくるなど前回よりは積極的な取り組みが見られたので、後期の授業でさらにグレードアップして実習に備えたい。この授業だけでなく、各研究室活動における模擬保育の場面においても子どもの歌を扱うことが可能になるはずである。

検討会においてもご指摘いただいたが、問題点として、この歌唱指導は子どもが歌うための歌詞を伝えることに偏っていることが挙げられる。本来は楽しく歌う先生を見て自然に歌詞も覚え、いつの間にか子どもも一緒に口ずさみたくなる環境を整える、言い換えれば保育者自身がそういった環境になることをめざしたい。しかし、個々の鍵盤技術が大きく異なり、旋律を弾くだけで精一杯の学生も存在するため、現在のところ、弾き歌いの技術習得をめざすこの授業科目の中でそこまで踏み込むことは時間的にも無理がある。子どもたちにもどのように声をかけてその歌に導くか、歌詞をどう伝えるかを体験することで、学生にとって意識の方向づけだけでもできればと考える。

後期課題曲は4月に提示済のため、すでに練習を開始している学生もいるが、5曲それぞれについて改めて楽譜を丁寧に見るという意識を持たせるため、前述のように注目ポイント等をまとめた資料を配布した。初心者が多く、前期の課題曲でそこまで指導する余裕がなかったためにこの時期になってしまった。これにより、これまで音符と歌詞しか見ていなかった学生が新しい視点を持って楽譜に臨むことを期待する。

また、現段階では演奏に際して合理的な指遣いを自ら選ぶことができる学生が少ないため、簡易伴奏に編曲した楽譜にはもちろん、教科書の楽譜についても推奨する指遣いを記入したものを配布した。過保護すぎるというご意見もあると思うが、弾き初めに間に合わせの指遣いで弾いてしまうと癖になってしまい修正がきかなくなり、その結果、音を外したりレガートが不可能になったりと最後までその曲としての望ましい表現ができないまま現場に出ることになることだけは避けたい。学生の中には、このように指遣いを指定しても自己流の指で弾いてくることも少なくないことが課題である。

課題曲 5 曲のさわりの部分だけであったが時間中に実際に取り組ませることができた。曲によっては電子ピアノまでこちらが出向いて指導したり、ピアノの方に集合させて順に弾かせてみたりと形を変えてメリハリをつけたことで一定の成果が得られた。難しい曲であっても知っている歌であれば「弾けるようになりたい」という気持ちが高まる。さらに、その曲の一部だけでも「弾けた」という感覚があればより積極的に取り組めるはずである。

普段から少人数の授業ではあるが欠席の学生もいたため、全体の流れを振り返ると指導案から外れた部分もある。グループの活動ができないことから個対応に過ぎて他の学生が取り残された場面があったかもしれない。しかし、一緒に授業を受けているグループとしての仲間意識が強いため、常に思いやりの気持ちを持って相互に高めていける環境ができつつあることが、様々な意味で喜ばしいと感じている。

（３）音楽面から見た保育者養成の現状と課題

短期大学の２年間で学生にどのような音楽的経験をさせることができるか、カリキュラムのスリム化を進める中で音楽に割くことができる時間は限られているため、内容を可能な限り厳選しなければならない。繰り返しになるが、本学では直接「音楽」と言える授業として、第１ Semester と第２ Semester でこの授業「子どもと音楽表現Ⅰ」と「同Ⅱ」、第３ Semester で選択科目「ピアノ特別演習」として弾き歌いだけでなくピアノ曲も含めて指導を受ける機会がある。ここまで、個人指導の要素が大部分を占めるので担当教員との関わりを通して音楽の心や人と関わる時の思いやりや温かさをも育むことをめざしている。さらに第４ Semester で「保育内容－音楽表現」を開講、今年度入学生から選択科目になったが、ここでは広く保育における音楽活動を体験させたい。講義形式ではあるが時にはグループ活動も取り入れながら実践的に器楽活動やリトミック、簡単な作曲を含む音楽劇にも取り組ませている。さらに「保育の表現技術発展演習」では音楽表現と造形表現を併せた発展的な内容を扱っている。

入学時の状態は非常に個人差が大きい、以前に比べて（音楽面から言えば）全体のレベルが低くなっていることは否定できない。子どもの歌、それも昔から歌い継がれてきた歌を「知らない、聞いたことがない」という学生が多いことに驚かされるのである。各種音源の発達で、赤ちゃんにお母さんが優しく歌いかけることがなくなってきたのだろうか。その他にもおそらく、ゆとり教育の中で「音楽」が軽視されてきたことや、（他にすることが多すぎて）子どもにピアノを習わせることも明らかに減少していることも原因になっているのかもしれない。

ピアノを弾いたことがないという学生であっても知っている子どもの歌のメロディーが自分の指によって奏でられた時の小さな喜びが原動力となって様々な曲にチャレンジしていくことができる。個々の学生に合わせた簡易伴奏譜の与え方が最も重要なポイントとなり、どの程度レパートリーを増やすことができるかもそこにかかっているのではないかと考える。簡易伴奏で弾いているうちに、好きな曲についてはどうしてもオリジナルの格好の良い伴奏で弾きたくなり果敢に挑戦する学生も多い。そこまで弾けない学生も、オリジナルの伴奏を十分に聴くことによってそこに表現された曲の背景・雰囲気を感じ、初めて作曲者の感覚や意図も理解できるので、学生に歌わせる時などは頻繁にオリジナル伴奏を（授業者が）弾くようにしている。

保育者自身の音楽に関するレパートリーが（自分で演奏できないものも含めて）広いと子どもの生活は豊かになる。保育の場で様々な音源が使用できるようになった現代、ピアノを弾き、歌うことばかりではなく、折に触れて最適の音楽を提供できる保育者が求められているのである。学生が音楽に対してどう向き合うのかは個々に大きく異なるが、より広い観点から音楽に触れられるように助言していきたいと思っている。

おわりに

将来保育者として、保育者自身の存在そのものが子どもにとって望ましい音楽的環境であることをめざしてほしい。そういう考え方で保育者養成に携わる中で、当然のことではあるが、保育指針や教育要領で言われる「豊かな感性」に注目しなければならないと考える。「感性」については最終セメスター選択科目の「保育内容－音楽表現」で扱うが、日頃から音、そして音以外のあらゆる環境に対して学生自身が自らの感性に気付き、保育者として感性豊かに子どもたちに接してほしい。子どもの表現を敏感に受け止め表現の喜びを共有することで、感性豊かな思いやりにあふれる子どもが育まれるはずである。

謝辞

学科の先生方には、ご参観いただき、そして検討会にもお付き合いいただきありがとうございます。少人数グループで、ほぼ個人レッスンに近い形だったため「研究授業」が成立するのかという不安もありましたが、逆に個々の学生の新しい一面もご覧いただけたかと思えます。検討会、参観記録を通して、普段、講義形式の授業をなさっている先生方より貴重なご意見や励ましの言葉、ご感想など、多くのご指導をいただきましたことを今後の授業や学生対応に活かしていきたいと思えます。この場を借りて心よりお礼を申し上げます。

参考文献

- 内閣府、文部科学省、厚生労働省『幼保連携型認定こども園 教育・保育要領 平成 29 年告示』フレーベル館、2017 年。
- 厚生労働省『保育所保育指針 平成 29 年告示』フレーベル館、2017 年。
- 文部科学省『幼稚園教育要領 平成 29 年告示』フレーベル館、2017 年。